

「最後だから」

「・・・だから」

例年通りの夏が始まる。あの2日が嘘の如くに、ただの幻想の如くに。
蟬が鳴く。風が吹く。風鈴が鳴る。玄関の外で打ち水のような音がする。夏は音が多い。
他の季節に比べて音が多いのは何故だろう。いつもせわしなく感じる夏の音だ。
居間に寝転がり、目を閉じる。暗い世界に耳から入る音で情景を創る。夏休みの宿題など
入ってすぐに終わらせた。扇風機の風が肌を通り庭へ向けて流れていく。今年の夏は音も風も
色も、全てがただ心地良い。こんな気持ちは初めてだった。きっと心の何かが大きく変わっているに違いない。
清々しい感情に浸りながら夕方を迎え、夜になり、また1日が始まり、気づけば一週間が経っていた。

テレビでは今年が異例の猛暑だと伝えていた。映像は海やらプールやらが人でごった返す。
様子を映していた。広報の放送でも熱中症に気をつけるように注意を促していた。
「暑い暑い」そんな声が至る所から聞こえた。それなのに僕は気づけば玄関先に立っていた。
暑さは感じていた。いつもなら家で、日影で寝転がっているはずだ。なのに僕の心は外にいた。
強いて理由付けするのなら、耳で、音で想像した夏の情景を確かめたかたというところだろうか。
僕は陽炎の上をあてもなく歩いた。

古ぼけた商店街を歩く。何度も工事が繰り返され、凸凹だらけの道路に時折足をとられた。
建物は古いが街には活気がある。打ち水が蒸発し、雨の降り始めのような香りがした。
川にスイカが置いてある。川の水で冷やしているのだろう。風鈴が至る所から聞こえ、
気温とは裏腹に涼しげな雰囲気は街を包んでいた。渡り鳥だろうか、美しい鮮やかな
鳥が頭上を越えて行く。連れられるように僕はその後を追った。
夏の悪戯なのだろうか、気がつけば海に立っている。昨年まで夏なんて嫌いだっただのに、心のどこかで
この季節がこの景色が永遠に続いてほしいと願っていた。海岸線を歩く。潮騒がきらめいて
どこか幻想のような眩しさを映し出す。目を半分ほど見開いて少し遠くを眺める。白い鳥のような
何かが見えた。人だ。あの日の、夏が変わったあの日の幻だ。
走る。幻が消えないように、夢から醒めないように。かすれた声で叫ぶと彼女はこちらを見た。微笑んで、
お会いえない、電車とともに消えたあの日にそう覚悟していたから。あまりに長い間、彼女と会っていないように
感じた。だから... だから....
「何で泣いてるの？」彼女が不思議そうに声をかける。涙は無意識に頬をつたっていた。悲しい時以外
に初めて流した涙だった。「嬉しくて...」小さく呟く。「変なの」彼女は笑った。しばらく静寂が続く。
二人水平線を見つめていた。初めて会ったあの日、彼女と別れてから考えていた、山ほど思いついていた
「話題」は完全に消えていた。突然だったから。不意に彼女が顔を寄せて言う。「行こっか！」
「どこへ？」急な言葉に驚いて、そう答える。彼女は手を顎に当て、少し考えた後に答えた。
「どこか遠くへ」突然なことに呆気にとられていると彼女は立ち上がり、続けた。
「私ね、この夏を特別な夏にしたいんだ。夏だから。」言葉の最後は大きなトラックの音で
聞きとれなかった。笑顔でこう話した彼女は、何故か少し悲しそうだった。
「行くか」僕はそう答え、海岸の駅へ歩いた。





慣れ親しい街並が遠くへ消えていく。旅行などいつ以来だろうか。親にも何も言わず
まるで家出のようにこの街を出てしまった。きっと帰ったら怒られるだろう。
でもそんなことどうでも良いと思う程、今は...

— 幸せだ —

何かから逃げるような宛てのない旅だ。路線図も見ずにどこへ向かっているのかも分からずに
どの駅で降りるのかも決めていない。時に彼女が、またある時は僕が、何となく降りたくな
ところで提案し、降車する。

「ここで降りよ！」いつも以上に大きな声で彼女は言った。良いものでも見えたのだろうか。
あたりを見渡す。いつの間にか僕たちは山の中にいた。駅から出ると大きな川が流れていた。
海とは違った新しい水の音だ。波の音はどこか重く、強いものを感じる。しかし川の音は繊細で
柔らかく、優しいものだと思える。海ほど強烈なものではないが、日の光に照らされ、水は
輝いていた。買っておいたお弁当を食べる。川辺に座っており、水がすぐ近くを流れる。

アスファルトに囲まれた人がせわしなく動く街とは違う、静かな自然の景色。

ここでは時にはゆくりと流れる、そう感じる。

夏だということ、猛暑だということもすっかり忘れてしまっただけの優しい時が流れた。

ぼんやりと景色を眺めていると、冷たい水が飛んできた。驚いて見回すと彼女が
川の中で遊んでいた。大人のような見た目に反して、その姿は子供のようにだった。

無邪気な笑顔だった。その姿を忘れないように目に焼き付けた。

駅に戻る。幸せな時間とはいえ、流石に疲れがたまっていた。彼女もその様子で

「帰ろっか」と少し寂しそうに言った。電車に乗って帰路につく。

始めは車窓を眺めながら、お互い今日の出来事を話した。しかし暫くすると

彼女は小さくあくびをして寝てしまった。僕によりかかる形で。長い長い帰道だった。

どうやら僕も少し寝ていたらしい。気がけば日は傾いていた。アウンスで聞き覚えのある
ような街の名前が聞こえた。彼女の肩を優しく叩いて起こした。半開きの目で迎りを見
わたすと、柔らかい笑顔で「ごめん、寝ちゃってた」と言った。

車窓は見覚えのある街並みへと変わり、いつものあの駅で降りた。

日は暮れていた。浴衣姿の人を沢山見かけた。電柱に貼ってあるポスターを見る。

今晚はどうやら花火大会らしい。もう少しで始まる。

行かないと

心が、体が動く。気がけば彼女の手を掴み、海岸線を走る。

きっと驚いていただろう。行かなければならなかった。

彼女と初めて会った、夏が変わったあの場所に。



118
瀬名医院
トクホ

歩行者優先

50